

戦後北部九州のサークル運動における文学：「サークル村」を中心として

茶園，梨加

<https://doi.org/10.15017/1440990>

出版情報：九州大学，2013，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 茶園 梨加

論文題名 : 戦後北部九州のサークル運動における文学―「サークル村」を中心として―

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、「サークル村」とその周辺の文学集団、運動体に所属する同人たちの作品を取り上げて彼らの創作方法を調査することで、彼らがいかなる背景のもとで創作を行ったのかを考察しようとするものである。戦後文化運動は一九五〇年以降全国的な広がりをもった運動であった。五〇年代から六〇年代にかけての文化運動を支えたのは、後に作家として活躍する同人だけではない。掲載された小説や詩、短歌、生活綴方は、所謂「無名」の書き手によるものである。そうした人々の表現活動の評価と位置づけは、文化運動総体の把握においても、戦後文学史、思想史を把握する上でも、きわめて重要である。庶民による数多くの創作が集団の中で形成され、文化活動が成された点に文化運動の性格がある。そのため、個々の作家を固有名としての評価だけでなく、「サークル村」があらわれたコンテクストを見る必要がある考え、サークル誌の資料発掘を行い検討を行った。

まず序章では、各先行研究の概観、本論の問題設定を述べると共に、当時のサークルに関する議論についても触れた。サークル誌と中央誌を往還的に検討することで、「サークル村」を当時の文化運動のなかにもう一度位置づけ直した。

以下、第一章から第三章までを「第一部 サークル運動における文学の役割」、第四章から第六章までを「第二部 サークル運動の内と外」とする。第一章「日炭高松におけるサークル運動」では、「サークル村」創刊の母体となった日炭高松（遠賀郡水巻町）のサークル誌を取り上げた。同時に職場機関紙や会社側・行政側の機関紙「日炭高松」や「広報水巻」などの紙面に散見される様々な文化団体の存在をもとに、炭鉱における文化活動の諸相を重層的に捉えた。ガリ版文化によるサークル誌や機関紙が他地域のサークルと広く交流を行っていたこと、又、サークル内の交流が促進されるために労働現場をそのまま描く作品が描かれたことを論じた。

第二章「文学サークルの展開と、その表現―「山田文学」の場合」では、山田文学サークルのサークル誌「山田文学」について論じた。サークル運動の内部でたびたび出てくる、労組とサークルとの関係や、芸術性と大衆性の問題が端的にあらわれる事例として「山田文学」を取り上げた。「山田文学」は、三池闘争で歌われ、広く歌われるようになった「がんばろう」を作詩した森田ヤエ子に所属していた文学サークルである。森田や、おなじく同人であった詩人・木村日出夫は後に「サークル村」に参加するようになる。誌面に発表された詩作品の傾向や、労働組合とは別のサークルという単位で表現活動を行ううえでの彼等の葛藤を確認した。

第三章「労働闘争のなかの文学―三井三池と文化運動」では、戦後労働運動におけるメルクマールとしての三池闘争を対象とした。三池における文化運動の諸相を踏まえながら、労組との関係によって自由なサークル活動が行われなかったことを確認し、「サークル村」に三池の労働者が参加していない理由を探った。集団創作の方法が探られていると同時に、組織と個人の問題が未解決のまま存在したことを明らかにした。

以下の「第二部 サークル運動の内と外」では、集団としての創作という問題意識を内面化している具体的なあらわれとして、上野英信、森崎和江、石牟礼道子の作品を取り上げた。対象とした作品は、他者の主体を代行するかたちでの創作手法を採ったものである。

第四章「上野英信「あひるのうた」におけるサークル運動と朝鮮人」では、上野英信による短編「あひるのうた」の分析をもとに、炭鉱とその周辺に存在した「アリラン租界」の関係、ひいてはサークル運動と朝鮮人問題について考察をした。サークル誌に朝鮮人たち〈他者〉の存在が稀薄であることが当時の国民文化運動の特徴と繋がることを論じた。

第五章「森崎和江作品にみる聞き書きと詩―「まっくら」と「狐」の関連から―」は、森崎和江の作品を対象とした。『まっくら』は、「サークル村」「無名通信」に初出を発表、聞き書きのかたちをとる。森崎の創作全体を見渡すためには、聞き書きとテーマを共有する詩作品の関連をみる必要がある。本章では、研究の新たな試みとして、聞き書き『まっくら』とダイアログ型の詩「狐」との類似性を指摘し、森崎の、対象との距離の取り方を考察した。

第六章「石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病』成立の過程」は、「サークル村」同人であった石牟礼道子に焦点をあてたものである。「サークル村」の存在がいかに石牟礼道子の創作過程に影響を及ぼしたのか、その過程を明らかにし、集団創作として行われた聞き書きの方法について考察を行った。

終章では、これまでの各章を概観し、まとめを行った。また、今後の展望と課題を述べた。文化運動は、戦前から戦後にかけての庶民の主体化、労働観の形成などを考える格好のフィールドである。「サークル村」やその周辺の文化運動が持ち得た問題意識を考察することで、戦後日本が抱えた民衆運動がいかなる変遷をたどり、現在にいたるのかという問題を考察した。各サークル誌で提起された炭鉱の労働問題、水俣病問題、反核運動をすくい取ることで、依然現在でも問題である雇用やエネルギー問題といった今日の問題とも繋がると考えた。

また、資料編として本編中で取り上げる、「月刊たかまつ」（第一章で論じる日炭高松のサークル誌）、「山田文学」（第二章で論じた山田文学サークルのサークル誌）、「辺境」・「兄弟」（「サークル村」後、同人が参加した雑誌）の目次・解説を収録した。